手と手と手

岡山発 国際貢献

ESDって？（京山の挑戦4）

世界を切り開く鍵に

「今の社会は一生懸命に経済を発展させているから、持続するんじゃないですか？」

「しないと思うね」。中学生の意見は、間髪を入れず、ばっさりと切られた。

国連大学高等研究所（横浜市）の上席研究員・鈴木克徳（五四）。持続可能な開発のための教育（ESD）の研究者だ。

鈴木は、人口の高齢化に伴って労働力が不足し、国際競争力が落ちていく経済大国・日本の近未来を語った。石油など資源の枯渇問題、極端な貧富の差がある世界の不公正な状況についても解説した。

「今のままじゃ持続不可能な社会だから、ESDが必要なんだ」

二月十八日。午後十時を回っても、岡山市京山公民館（同市伊島町）では議論が続いていた。

その日の昼から始まった「ESDデー・フェスティバル」は、エコ料理や環境活動の発表会などに約二百五十人が参加。うち地元の小中学生や高校生、教師ら約二十人は寝袋持参で夜の部を迎えた。同地区の環境改善活動（KEEP）に参加するメンバーだ。中には、高校受験を控えた中学三年生の姿もあった。

自分の問題

国連キャンペーン「ESDの十年」は昨年一月から始まっている。

一九九二年の地球サミットで採択された行動計画「アジェンダ21」に、経済開発だけでなく、環境や社会と調和し、現在の世代のみならず、将来世代のニーズも満たす持続可能な開発に向けた教育、つまりESDの重要性は明記されていた。

しかし、二十一世紀に入っても環境に限らず、世界の紛争や貧困問題がさらに深刻化。二〇〇二年の環境と開発に関するヨハネスブルク・サミットでは、行動計画を作っても、行動する人間がいなければ、問題は解決されないことが問われた。「人づくり」の緊急性が「ESDの十年」には込められている。

夜になっても真剣な議論が続いたESDデー・フェスティバル＝2月、岡山市京山公民館

「弁論大会でESDのことを話したけど、みんなハア？って感じ。高校生は受験しか興味ない」

城東高一年の竹本翠が嘆くと、他の中高生も同調する。「みんな塾や部活が忙しくて考える暇がない」「まじめに話せば、ぼくらが特殊な人間に見られちゃう」

杉村洋子館長（五九）が議論に参加した。「アトピーとかもあるし、環境は健康、ひいては命にかかわる問題だと思う。でも、自分の問題に思えない。思えるようにする教育が必要なのよね」

生み出す

知らないことが正当化されていいのだろうか―。鈴木の問い掛けに、中高生からは不満の声が漏れた。「学校では教えてくれない」「勉強する時間がない」…。逆に、前向きな声も。「KEEPの仲間で勉強しよう」。京山中三年の幸谷勇作はつぶやいた。「でも、もっと広げたいじゃんか」

最年少の伊島小六年の竹本悠は、先輩におくせず発言した。「私みたいに小さい時に関心を持てば、受験でも手放せなくなるはずです。小学生がESDを学ぶことが大切だと思います」

議論は学校教育や総合学習のあり方に及んだが、分かったことは、ESDのモデルが日本にも世界にもほとんどないことだった。

「京山から生み出してほしい。あきらめないでチャレンジを続けて」。鈴木の言葉は、京山の挑戦が世界を切り開く鍵であることを一人ひとりの胸に刻みつけた。（敬称略）

第6部 地域で動く ⑤

ご意見をお寄せください。〒700-8734、山陽新聞「国際貢献取材班」。ファクス（086-245-5296）、メール（kokusai@sanyo.oni.co.jp）。